

独房^{どくぼう}の中にいる女は、備え付けの簡素な木製の椅子に腰かけていた。まるで透明な糸に縛られたかのように、ぴくりとも動かない。

彼女と外の世界は、一メートルを超える分厚いコンクリートと、強固な鉄格子で隔絶^{かくぜつ}されていた。

部屋の中は椅子とベッドの他に、丸い穴だけが開いている。トイレとして使われる、小さな穴だ。

こつ、こつ、と次第に大きくなる革靴の音にも、彼女は驚く様子さえ見せない。わずかにうつむかせた顔の中、澄み切った目だけが、きょろりと動く。

「いつも通り、みたいだな」

男はそう、声をかけた。女の顔がゆっくりと持ち上げられ、男の顔を見る。

「時間だ。お前の刑が、確定した」

この刑務所に勤めてから男は、何人もの死刑囚を見送ってきた。男は勤勉で、極めて口が堅く、刑務所の看守としては実に優秀。

そのため彼は定年間際の時期になっても、最も注意力と対応力が求められる死刑囚の独房を任されてきたのだ。

しかし彼女は、そんな歴戦の看守である男が見てきた中でも特別に、奇妙な死刑囚といえる。何人も殺した、凶悪な連続殺人犯だというのに。

「そう落ち込むな。喜べ、お前に良いニュースを持ってきた」

こう言えば多くの囚人は、残念がるか喜ぶか、あるいは怒った。何らかの感情をあらわにし、鉄格子の向こうで人間らしい動きを見せたのだ。

そこから男はよく、次の業務の手順を考えた。囚人に手錠をかけ、彼らが万が一にでも自ら命を絶たないように見張るのだ。

若いころ、男がまだ駆け出し^{かだ}の看守だった時に、思いつめた囚人が自分で自分の頭を独房の壁へ打ち付け、自殺したことがあった。

あの頃は先輩であった看守の責任となったが、死刑囚が自ら楽になることを許すわけにはいかないと、男は肝に銘じて生きてきた。

だからこそその問いかけに、女はやはり、ぴくりとも動かない。看守の顔を見つめるべく顔を動かした後、彼女は瞬き一つもしなかった。

男はことさらゆっくりと、女に言い聞かせる。

「被害者の遺族が、ついに勝ち取ったんだ。

映像刑^{えいぞうけい}だよ、映像刑。もちろん知ってるよな？」

映像刑とは、今から約半年前に“死刑より残酷で恐ろしい刑”として制定されたものだった。

看守である彼も、絞殺^{こうさつ}や銃、毒薬など、さまざまな死刑方法を見聞きしてきたが、これほど恐ろしいと感じた刑は他にない。

どのような原理になっているかは不明だが、簡単に言えば、死刑囚の記憶より映像を組み立て、編集したものを再び脳へ流し込む、といったものだ。

囚人は硝子^{がらす}張りの檻へ入れられ、頭部に専門の装置を付けられる。

そして映像刑が始まると同時、彼らもしくは彼女らの様子は現地で被害者の遺族たちに見届けられるのだ。

—— どこが恐ろしいんだ。まるでアトラクションだ。こんなのが死刑なのか、さっさと銃を持ってこい。

そんな囚人ほど、最後は絶望に呑み込まれ、惨^{むご}たらしく死んでいった。

そう。映像だけで、死ぬのだ。

この映像刑は最後に死をもたらししてしまう。目の前に現れる過去のトラウマに、やがて脳が耐えられなくなってしまうからだ。

しかしそれがいったい何時になるかは、分らない。

数十分で死んでしまった死刑囚もいれば、一千時間を超えてようやく死ぬことができた死刑囚もいる。

それほど死刑囚に金と時間をかけるべきか議論が巻き起こったが、やがて遺族たちからの声と死刑に値するような犯罪を犯した人間への
ばんばつか
厳罰化を求める運動により、映像刑は世間の支持を集めていった。

死刑よりも苦しく、死刑よりも確実な復讐でありながら、死刑執行人の負担はとても少ないことも、世間の支持を集めた大きな要因だ。

刑でどんなに苦しもうとも、映像刑を受ける人間の見た目は“安らかに眠ったような姿”のままなのだ。

看守の男も個人的には、映像刑に賛成していた。

極悪な犯罪を犯した死刑囚が、生まれたこと、罪を犯したことを、今のところ間違いなく後悔して死んでいくからだ。

「口で言わずとも、記憶を辿れば全てが浮き彫りになる。お前はどんな人生を歩んできた？」

映像刑を後押ししたのは、技術発展により人間の記憶を抽出できるようになったことだ。

映像刑と共に死刑囚の記憶が抽出されていくと、
彼ら・彼女らの過去が分かる。これは、誤審や
冤罪を減らすことにも繋がった。

中には家族を守るため、刑が執行されるまで口
を^{つぐ}嚙んでいた人間すらいたのである。

だが、こうした人間とも女はまた違うのだと、
看守は知っていた。

「まだ、^{あまつみかほし}天津鵜星を信じているのか…」

看守の男がそう声をかけると、ようやく女の顔
に表情が浮かんだ。

柔らかく、優しく、彼女の頬が緩む。純粹すぎ
るあまり壊れそうなほど、清らかな笑み。

男は彼女の表情に、眉を^{ひそ}顰める。

「ここへ来てから、何も話そうとしない。毎週
のカウンセリングも無意味だった。あの事件を
引き起こした本当の理由も、結局話すことは無
かったか…」

すると女は急に真顔へ戻り、ゆっくりと瞬きを
し始めた。

薄気味悪い。看守の男はそう、素直な感想を抱
く。

映像刑がもたらしたのは、死刑囚への効果的な
刑罰ばかりでない。

非人道的行為にならないよう、カウンセラーに
よるヒアリングを通じて刑罰の内容を説明する

ことで、時には反省さえ促せるようになったのである。

これらは看守の男にとっても、死刑囚たちへの印象をわずかに変える出来事だった。

彼らにも生涯があり、そして死刑につながるような犯罪を起こすための理由があると分かったからだ。

数日前、女のわずかな記憶がサンプルとして抽出されていた。

その中では彼女を^{ほと}罵倒する高校教師や、かつて彼女の上司だった人物の姿も確認されたという。しかし^{こんかん}根幹の記憶には研究者もアクセスできず、詳細は全くの不明だ。

まれにこういう人間がいるのだと、対応した研究者が興味深そうに呟いていたのを看守は思い出す。

「記憶を保護し、いつまでも脳内で保ちつつ、思い起こす際にその時の感情を再現することが異様なほど得意。

こういう人間は、映像刑のような外部からのアクセスを拒む力もとても強いんです…。

実験に協力してきた某死刑囚もこの傾向がありましてね。…とても時間が、かかるかもしれません」

その通りなら、かなりの時間が必要だろう。看守の男は、実験に協力したという、とある死刑囚の最期を思い出す。

かの死刑囚は映像刑に最も長く耐え抜き、最後には退屈になったのか、「よし、死のう」と、そう言い放ち息を引き取った。

映像刑の中でも自殺が可能だと分かった事例であり、今では自殺に近い行動をとろうとすると、強制的に蘇生が行われる仕組みまで作り上げられている。

（彼女もまた、そういう人間なのかもしれない…）

看守がそう思ったのは、彼女に専門のカウンセラーがついていたためだ。

彼女は天津鸞星という、空想上の神を信仰し続けていた。

彼女が犯した凶悪な犯罪の根幹に触れられるかもしれない、としてカウンセラーは努力したようだが、こちらは無しのつぶてというやつである。ようは、何もわからなかった、ということだ。

女はぴくりとも動かず、時計は刻々と動いていく。看守の男は浅くため息をつき、独房の施錠を外した。

「さあ、出ろ。被害者の遺族がお待ちかねだ」

頑丈^{がんじょう}な鉄の扉が、ゆっくりと開かれる。

女の周りには、凶器になるようなものは何一つない。そのため看守の男はすぐに女のそばに行き、細くやつれた両手に手錠をかけた。

「俺の後ろをついてこい」

女は映像刑を楽しみにしているのか、わずかに口元に笑みを浮かべる。

この半年のうちに処刑された死刑囚の中には、最新の処刑方法である映像刑を受けられることに、むしろ喜ぶ者さえいた。

彼女も、そのうちの一人なのだろうか。

看守の男は、女を引き連れて廊下を歩きだす。

真っ白な廊下はどこか病院にも似ているが、これは女の死刑台へ続く道だ。

死者になる者だけが歩ける特別な道を通り抜け、看守の男はある部屋の扉を開ける。

目が痛むほど、白く、眩しい部屋。中央に置かれた硝子^{がらす}張りの檻は、周囲を取り囲む配線と、精密機器が吐き出す僅^{わず}かな音に、思った以上に高い排熱で、決して快適ではない。

何より、部屋の中は被害者の遺族が放つ殺気と悲しみに、揺れ動いていた。

誰も女に声はかけないが、鋭い目つきで女を睨むのが看守には見える。

「ええっと…この席へ腰かけてください…」

死刑囚に対しても丁寧な言葉遣いを心掛けるのは、映像刑を任せられている研究者だ。

緊張しているのか、手は小刻みに震えていた。

しかし看守は、知っている。

むしろ興奮している。^{きだい}稀代の犯罪者がいったい、何をもたらしてくれるのか。

そして怯えている。恐るべき殺人犯が万が一、自分に危害を加えやしないかと。

いつもより丁寧に配線をつなぎ、作業を終えた研究者が硝子張りの檻から出た。

看守もその後に続き、責任をもって檻へ鍵をかける。女は檻のすぐ傍に立て付けられたモニターに、じっと目を向けていた。

モニターに映るのは、どこかの豪邸らしき映像だ。ずいぶんと荒れているのか、あちこちが植物に^む覆い尽くされている。

一体、彼女のどんな記憶から編集された映像なのだろうか。男は考え、すぐにやめた。

彼女に聞くべきことがあったからだ。

「何か言い残したいことはあるか」

これは業務の一環。死刑囚全員に聞いてきた、一つの問いかけ。しかし、この日ばかりは、看守の男は純粋な興味からこの質問をした。

「この世界は…まさに^{きそうてんがい}奇想天外ですね」

女は笑顔で、そう答えた。どういう意味なのだろうか。

看守が考えかけたその時、彼女の目が^{また}瞼の内側に隠れていく。モニターの中に写し出される映像が、彼女の視点へと切り替わった。

映像刑が、始まる。